

の「現存在」における根本的虚無性を暴露するものであるが、かかる無の顕現ということと、願力自然の浄土無為への転入との間には、本質的にいかなる「異」が存在するであろうか。私は、このことを明示する手懸かりを如来の願心を歴史的体とすると他力回向の横超的「至心」に求めたい。しかるに我々の自己は、「現にこれ罪惡生死の凡夫」（散善義）である。そこには、如来の「至心」を体とする「信樂」など自身の何処にも無い。「信樂」は疑蓋間難なき如来の眞実信心である。それゆえ「宿業本能」（曾我）の身である我々では、決定して「乗彼願力」を深心するなど到底できるものではない。しかるに如来は、かかる我々を悲憫いたし、「本願一乗円融無碍眞実功德大宝海」（二念多念文意）に帰入せしめんとして、この私の自己のために法藏比丘となつて、永劫の修行を重ね、ついに願行成就して、その功德のすべてを我々に回施し給うたのである。「至心に回向せしめたまえり」は、かかる意味をよく表していると思う。

まことに自己が絶対の無となるという絶対無の自覚とは、「出離の縁無き身」と知れという如来の呼び声に聴従する「得者の道」である。我々の自己がどこまでも自己を超えて、西田の「絶対無の自己限定」として、「念々に生死して、而も生死せない」（全集11、四二二）永遠の生命を有つことである。「絶対現在」はかかる「信の一念」、「信樂開發の時剋の極促」（信巻）を表現するのになければならぬ。「極促」とは、自己が何処までも、「前念命終」して、「後念即生」の身となるということと、念々に往生決定の身となるということであろう。それこそ

が、生死即涅槃を証する道である。しかしこのことは、如来の「至心」を体とする大悲回向の「信樂」なくして成就できるものではない。

浄土は単なる哲学的主観の自力的表象観念であつてはならない。絶対の他力的実在、如来の眞実信樂を「因」とする願力自然の歴史的体とも云うべき「実相の身」を生命とするものでなければならぬ。そこに我々は、哲学的自覚の超越論的立場を超えて、如来選択の願心としての浄土を横超的に開顕せしめられるのである。誠に浄土とは、如来の「眞実」を象徴する至心回向の功德宝海に他ならない。親鸞の「三心」釈は、かかる横超的至心としての如来の大悲大願の自証原理を明かさんが為であると云えよう。

親鸞における「少善」について

平原晃宗

親鸞の著作において「少善」という語句は『教行信証』『化身土巻』、『浄土和讃』、『浄土三経往生文類』の『阿弥陀経』や第二十願に関する箇所で見ることが出来る。「少善」の典拠は『阿弥陀経』にある「少善根福德の因縁」であり、「少善」とは「少善根」のことを意味する。また「少善」に対する語句は「多善」であるが、親鸞は「多善根」を含めて、これら語句をほとんど使用しない。

しかし、法然は『選択集』『多善根章』で念仏と雑善、つま

第7部会

り諸行を「多善根」「少善根」と対比し、さらに大小・勝劣という相対三義において念仏と諸行を対比している。これは、法然が念仏と諸行の優劣をつけるために対比したのではない。法然が善導の指教により「廃立」の教学を徹底したことからも了解できるように、念仏が阿弥陀仏の選択本願の行であることを明らかにしようとしたのである。

このように法然が念仏を選択本願の行であることを明確にしたように、親鸞も「隠顕」という教判をもって釈尊の経意を明らかにし、廃立の内容をさらに展開させるのである。

「化身土巻」では、『大経』、『観経』、『阿弥陀経』の信心の同異を二つの問答で述べるが、そこに『観経』の隠顕と『阿弥陀経』の隠顕が説かれている。その中でも「少善」の語句は『阿弥陀経』の隠顕で見られる。

親鸞は『阿弥陀経』の隠顕で、『阿弥陀経』の表面上の「顕」の義を「経家は一切諸行の少善を嫌貶して、善本・徳本の真門を開示し、自利の一心を励まして、難思の往生を勧む」と述べる。この文では、釈尊が諸行を少善根として嫌い貶め、善本・徳本の真門を開示し、自利の一心を励ますことを示している。ここで、念仏を多善根として勧めるのではなく、「真門」が開示されることは、第二十願の開示を意味し、その内容は一心不乱になって善本・徳本の名号を執持する自力作善の心を勧めることである。

一方、『阿弥陀経』の深意をあらわす「彰」の義には、「真実難信の法を彰す。これすなわち不可思議の願海を光闡して、無碍の大信心海に帰せしめんと欲す。良に勧めすで恒沙の勧め

なれば、信もまた恒沙の信なり、故に甚難と言えりなり」とある。一心不乱に念仏しても、自力作善の心に基づくのであれば、真実信心は成就し難きことを難信と示し、諸仏が恒沙の信を勧めることにより、自利の一心は破られ、離れ難い自力執心の身を信知することが読み取れる。諸仏の勧めは、衆生の自利の一心の実相、つまり名号を己が善根とする自力執心を自覚せしめ、無碍の大信心に帰入せしめようとする、方便誘引の用きを意味する。これが第二十願の大悲心の現働、果遂の誓の具体的な用きなのである。

この『阿弥陀経』における隠顕は、自利の一心を勧めることを否定媒介とし、離れ難い自力執心の身を信知せしめ、真実信心を獲得せしめようと方便誘引する如来大悲の用きを教示している。つまり親鸞は『阿弥陀経』から念仏行者の信心を問題にし、如来の大悲心を浮き彫りにしたということがいえるのである。

親鸞は、法然が念仏と諸善を多善根・少善根と対比したことを単に優劣をつけた比較ではなく、選択本願の行を明確にするための営為であることを明らかにした。それは、親鸞が法然の「廃立」をさらに展開させた『阿弥陀経』の「隠顕」をもって念仏行者の信心の問題と如来の大悲心を明らかにしたことから明確になったといえる。以上のことから親鸞は、諸行の「少善」に対して念仏が「多善」であるという優劣を積極的に述べるのではなく、『阿弥陀経』の隠顕によって、真門である第二十願の内容を明確にし、如来回向の「大行」「大信」の内実を浮き彫りにしたといえるのである。